

学校だより

5月号

やさしい子 たくましい子 考える子



黒門

発行日 令和7年4月30日
発行者 台東区立黒門小学校
校長 飯塚 雅之

心を込めて行うことの意味

校長 飯塚 雅之

新年度が始まり、子供たちは各学級での係や委員会活動での仕事に取り組み始めています。

新しい環境に戸惑いながらも、自分の役割を見付け、毎日を少しずつ形作っている姿に成長の芽を感じています。学校生活には様々な仕事があります。行事の準備・片付け、掃除、給食の配膳準備・片付け等、一人一人の子が自分の持ち場で学校全体の生活を支えています。どれも一見すると目立たない仕事かもしれませんが、しかし、誰かがその仕事を丁寧にしてくれているからこそ、みんなが気持ちよく活動し、安心して過ごすことができるのです。

6年生は、1年生が早く学校生活に慣れるためのお世話をしてくれました。おかげで1年生は自分のことを自分でできるようになり、学校生活にも早く慣れることができました。

それでも、やはり心の中に不安もあるのでしょう。登校を渋り、正門で動けなくなってしまった1年生を「大丈夫?」と明るく声を掛け、靴箱に導いてくれる6年生の姿がありました。

決して与えられた仕事ではありません。その子は当然のことをしているという意識でしょう。しかし、その行動が相手だけでなく、周囲の人々のためになり、温かい気持ちを広げてくれています。

有名な「3人の石工」の話があります。

ある旅人が石を積んで働いている3人の男に出会います。旅人は1人めに「あなたは何をしているのですか。」と尋ねました。彼は、「見れば分かるだろう。石を積んでいるのさ。」と答えました。

2人めは「家族を養うために働いているんだ。」と答えました。そして、3人めの男は顔を上げてこう言いました。「私は未来の人たちが集う大きな教会を建てているのです。」

同じ作業をしていてもその意味付けが違うことで、働くときの気持ちや姿勢が全く変わってくることをこの話は教えてくれます。

子供たちが日々取り組む係や委員会活動も「誰かのために」「みんなのために」という思いが込められている時、それは単なる「仕事」ではなく誰かを支える「行い」になります。時には忘れてしまったり、うまくいかなかったりすることもあるかもしれませんが、でも、そんな経験を重ねながら子供たちは自分の力で学校をより良くするという主体的な姿勢を育てていきます。

そして、その過程で「働くことの意味」や「やりがい」を知っていくのだと思います。子供たちの成長は決して一足飛びではありません。小さな一歩地道な努力の積み重ねがやがて大きな自信や力となっていきます。日々の学校生活の中で「心をこめて取り組むことの大切さ」を子供たちに伝えながら、その姿を丁寧に見守っていきたいと考えております。

